

一卷頭エッセイ

博物館と私

豊 遙 秋¹⁾

上野にある国立科学博物館の本館(1号館)は空から見ると飛行機の形をしている。かつては、1階の向かって右側の主翼は地学系の展示室であった。展示室の標本は古ぼけたガラスケースに、化石は時代ごとに、岩石は種類別に、鉱物はデーナ(注)の分類順に並べられ、当時小学生であった私の目には皆すばらしいものばかりで、まさにあこがれの存在だった。ガラスケースに顔を押しつけて飽きずながめた標本たちを今でも明瞭に思い出すことができる。その頃、地学同好会の名で館主催の野外採集会があり、採集した岩石、鉱物、化石の名前を調べるために休日にはよく博物館へ通った。風呂敷に大切に包んだ標本をケースごしに比較したり、わけもわからず化学組成をノートに写しとったりしたものである。本館の尾翼左側には研究室があり、ここで先生方から直接教えてもらえるばかりか、研究室の片隅に転がっている化石や、鉱物の標本をもらって帰ることもあった。私が、地質標本館で鉱物を扱う研究者として今日あるのは、あの古めかしい展示室と、わかりやすく、いつでもやさしく応えてくれた先生方の存在をぬきにしては考えられない。鉱物の分類展示は、昭和39年頃に新しくできた2号館へ移り、やがて、自然史館が昭和49年にできてから、いわゆる分類展示はなくなり、展示された鉱物標本も減少した。いずれにしろ我が国では博物館における鉱物の分類展示は片隅に追いやられ、形ばかりのものになってしまっているのが現状である。

私が昭和30年代科学博物館に通っていた頃、博物館の先生の紹介で当時川崎市溝の口にあった地質調査所の標本室に行くようになった。特に公開されているわけではなかったが、子供だった私に標本室を開き、好きなだけ時間を費やすことを許してくれた。屋根型の展示ケースが、子供の目には

果てしなく続いているように見え、ケースが高く、つま先立って見ないと見えなかったような記憶がある。現在、地質標本館に展示されている標本のかなりの部分が、40年近く前に見た標本そのもので、私が地質標本館でこれらの標本と再び出会うとは想像だにできなかったことである。

現在、地質標本館の第4展示室の鉱物標本は、化学組成と結晶構造に基づく分類に従って、展示されている。このような分類展示が国内の博物館でほとんど見られない今日、地質標本館へ行けば十分ではないが、日本産の鉱物を中心に約250点の標本を見ることができ、世界的に見ても分類展示はスペースを要することや、この基礎となる多くのコレクションの存在がなければできない点で、どこでも見られるものではない。ロンドン、パリ、ウィーン、プラハ等その国を代表する自然史博物館で分類展示を見ることができ、その数と種類においては、日本と比べものにならない多くの標本が展示されている。しかし、一方ではこのような展示室では、見学者の数は少なく、閑散としていることが多いことも事実で、こうしたことを理由に、大規模な分類展示室は少しずつ縮小される運命にある。地質標本館の鉱物の分類展示は、地質調査所の100年以上にわたる調査・研究の成果として集められたもので、国内では当館でなければ見られないものと自負している。将来にわたってこの展示の充実を図り、見学に訪れた人々に鉱物標本を通して地球内部で起きている様々な現象を解く手掛かりを与え、地学ばなれ、自然ばなれの流れを変えたいと思っている。そして、当時10代の生意気盛りの私に、いろいろとやさしく指導してくれた当時の博物館や地質調査所の先生方のように、見学に訪れる子供達に今接しているか、自分自身の胸に問いかけている。

1) 地質調査所 地質標本館

注) J.D.Dana (1813~1895) アメリカの鉱物学者。鉱物分類学の基礎を作った。